指導用ガイド

デジタル社会を知る
全5章

目次

第１章 2
第２章 17
第３章 27
第４章 38
第５章 49

第１章 デジタル社会のきほん

― 身近な生活から社会へ視野を広げることを目指します ―

本章では、身近な生活場面に見られるデジタルの具体例から学習を始め、デジタル社会の基本的な仕組みや役割への理解を段階的に深めていきます。

生徒がすでに経験している事柄を起点とすることで、デジタル社会を自分の生活と結び付けて捉えられるようにするとともに、比較や問いかけを通して自ら考える過程を重視します。

また、本章を通してデジタルを受け身で利用するのではなく、生活の中でどのように関わっていくかを考えようとする姿勢を育てます。

本章は、第２章以降の学習の基盤となる理解を形成する章として位置付けています。

本章の構成

本章は次の３節で構成しています。

第１節 デジタル社会とは何か
第２節 デジタル機器とツール
第３節 デジタル社会で大切なこと

第１章 第１節「デジタル社会とは何か？」

(1)学習目標と単元の概要

本節はデジタル社会の全体像をつかむ導入として、スマートフォンなどの身近な道具に限らず、駅や病院など社会のあらゆる場面でデジタル技術が活用され、生活を便利で安全にしていることに気づかせることをねらいとしています。(間) 授業では、生活圏内の具体的な事例(1.1.1)と、それらが持つ『情報の速さ』や『場所の壁の解消』といった社会的機能(1.1.2)の両面から学習を展開します。

(2)指導の要点と基本方針

指導にあたっては、大きく二つのポイントを意識させます。一つ目は「見えないもの」への意識づけです。ゲームやスマートフォンの裏側でデータが動いていることや、IC カードをかざした時の「ピッ！」という電子音などを手がかりにして、目に見えないデジタルの存在を認識させます。二つ目は、「Before/After」の対比を用いてメリットを伝えることです。「昔は病院に行かなければならなかったが、今は家で診てもらえる」といった具体例を挙げ、デジタル化によって何がどのように楽になったのかを比較させることで、その価値を理解させます。

(3)具体的な指導の展開

デジタルはどこで使われているのか(1.1.1) スライド4～6

①概要

スマートフォンによる即時的なコミュニケーションや、物理的な距離を越えてつながるオンラインゲームなど、生活のあらゆる場面でデジタル技術が活用されている実態を学びます。また、インターネットが膨大な情報への入り口となっていることや、IC カード内のデータ処理が移動を効率化していることなど、デジタルの利便性について理解を深めます。



スライド 4　身近にあるデジタルの説明

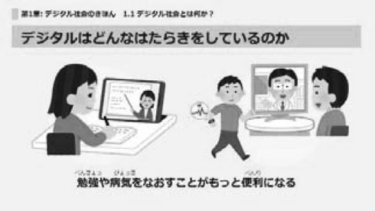
②指導を行う際の留意点

特別支援学校の生徒や抽象的な概念の理解に配慮が必要な生徒に対しては、言葉だけでなく視覚や体験を通じた工夫が求められます。例えば、コミュニケーションにおける時間の概念が難しい場合、「歩いて届ける手紙」と「ワープして届くメッセージ」のようなアニメーションを用いて速さの違いを直感的に伝えます。遊びの場面で「離れているがつながっている」という状況が理解しにくい場合は、実際に教室の端と端で通話を体験させると効果的です。検索については、「魔法の窓」のように好きなキャラクターがすぐに出てくる様子を見せて楽しさを強調し、IC カードについては「ピッ！」という音を合図に「通れる」という因果関係を明確にすることで、見えないデータの働きを具体的に捉えさせます。

デジタルはどんなはたらきをしているのか(1.1.2) スライド7～10

①概要

災害時の迅速な情報伝達が安全確保につながる仕組みや、キャッシュレス決済やクラウド保存のように物理的なモノをデータ化する機能について学びます。さらに、遠隔診療やテレワークが場所の制約を取り払うことや、ウェアラブル機器が健康管理を支援するなど、デジタル技術が社会機能を拡張し生活を支えていることを理解します。



スライド 9 デジタルで生活が便利になる説明

②指導を行う際の留意点

抽象的な概念や感覚的な刺激への配慮が求められます。防災のアラーム音に恐怖を感じる生徒がいる場合は、音量を調整しつつ、「この音が鳴ったら逃げていいという合図であり、みんなを守るための音」だとポジティブに伝えます。クラウドという概念が難しい場合は、「ポケットに入らないくらいのたくさんの写真が、この小さな機械に入っている不思議さ」に焦点を当てます。遠隔診療については、病院特有の雰囲気や待ち時間が苦手な生徒に対し、「お家で先生とお話しできるから安心だね」と心理的な安心感と結びつけてメリットを伝えます。また、健康管理の数値理解が難しい場合は、「走りすぎたら時計が『休憩してね』と教えてくれるよ」といった具体的なメッセージに置き換えて説明します。

(4)学習の成果と評価 本節の学習を通じて、生徒が身の回りにある改札やタブレットなどのデジタル機器を具体的に挙げられるようになることを目指します。また、デジタル技術が持つ「速い」「離れていてもつながる」「自分を守る」といった良さを、生徒自身の言葉や身振りで表現できる思考・判断・表現力の育成も重要です。最終的には、デジタル機器が生活を豊かにしている

ことに関心を持ち、それを肯定的に捉えようとする主体的な態度を養うことを評価の観点とします。

(5)参考 URL

① デジタル社会とは？私たちに「イマ」起きている 6 つのこと
出典元：ミライデジタル
https://mirai-digital.net/digital-society/
デジタル化によって私たちの暮らしやサービスが具体的にどう変わったのかを、身近な事例を挙げて解説しています。専門用語を使わず、現在進行形の社会変化を直感的に理解できる内容です。

② 情報化社会とは？ AI 時代を生きる子どもが身につけたい力と…
出典元：ベネッセ教育情報サイト
https://benesse.jp/kosodate/202010/20201022-5.html
情報化社会の成り立ちや進化を、子どもや保護者にも分かりやすい視点で解説しています。AI 時代を生き抜くために必要な資質や能力についても触れており、これからの教育を考える参考になります。

③ ICT とは何か？身近な例をご紹介！具体例も含めてわかりやすく
出典元：プログラミングクラウド
https://www.programming-cloud.com/column/children/2024-06-28/
ICT(情報通信技術)の言葉の意味から、SNS やネット通販など生活の中での具体的な活用例までをやさしく解説しています。技術的な言葉が苦手な方でも、ICT の役割をイメージしやすい記事です。

④ デジタル化社会とは？日本で行われている施策や企業ができること
出典元：あしたの人事オンライン
https://www.ashita-team.com/jinji-online/institutional/16764
デジタル技術で社会の利便性や生活満足度が向上する仕組みと、日本政府の施策や企業の取り組みについて解説しています。ビジネスや行政の視点から、デジタル化社会の構造を深く理解するのに役立ちます。

⑤【わかりやすく解説】これからの時代に求められる「デジタル・シティズンシップ教育」
出典元：Master Education（マスター教育）

https://master-education.jp/column/digital citizenship/
ネット社会を善く生きるための「デジタル・シティズンシップ」について、教育の視点から解説しています。ツールの使い方だけでなく、社会参画のための倫理観やデジタル技術との適切な向き合い方を学べます。

⑥ ICT 教育とは？学校教育での導入事例などを解説
出典元：デジタル・ナレッジ
https://www.digital-knowledge.co.jp/about/esi/icte/
ICT の基礎知識に加え、現在の学校教育でどのように導入・活用されているかの実例を紹介しています。教育現場を取り巻く環境や、デジタル社会における教育の背景を具体的に理解するのに適しています。

指導用ガイド：デジタル社会を知る
第 1 章 第 2 節「デジタル機器とツール」

(1)学習目標と単元の概要
本節は、身近にあるデジタル機器と、それらの機器上で利用されるツールの役割を理解し、両者の違いに気づくことをねらいとしています。スマートフォンやコンピューターなどの具体例を通して、「何を使っているのか」と「何ができるのか」という視点から学習を展開します。
授業では、日常生活における利用場面を想起させながら、機器とツールが組み合わさることでデジタル社会が成り立っていることを理解させます。

(2)指導の要点と基本方針
指導にあたっては、次の要点を意識させます。
まず、調べものや連絡など生徒が日常的に行っている行動を振り返らせ、デジタル機器やツールを身近な経験と結び付けながら導入します。生活の中で実際に使っている場面を想起させることで、学習内容を具体的に捉えられるようにします。
　その際、見た目だけで判断するのではなく、「情報を処理しているか」「何をするために使われているか」といった働きに注目させることが重要です。機器とツールの違いを整理する視点を示しながら理解につなげます。

(3)具体的な指導の展開
主なデジタル機器(1.2.1) スライド 14～16
①概要
コンピューター、スマートフォン、テレビなどの代表的なデジタル機器を取り上げ、それらが情報を処理することで私たちの生活を支えていることを学びます。また、デジタルかどうか判断に迷う例を通して、「データを扱う機械であるか」という視点を身につけます。



スライド 15　代表的なデジタル機器について具体例を挙げる

②指導を行う際の留意点
導入では、「家や学校で使っているもの」を挙げさせ、既有の経験を引き出します。その後、操作したときにどのような反応があるかに目を向けさせ、「触れると画面が変わる」「操作すると情報が表示される」といった具体的な働きを手がかりに理解につなげます。
デジタルかどうか判断に迷う例を提示した際は、すぐに答えを示さず、「情報を記録したり処理したりしているか」という観点から考えさせることが重要です。外見ではなく働きに注目する姿勢を育てます。
活動が止まった場合は、「それはどんなときに使うものか」と問いかけ、使用場面を想起させることで思考を促します。

便利なデジタルツール（1.2.2） スライド 17~19
①概要
ウェブブラウザー、メール、SNS などのデジタルツールを例に挙げ、それらが情報収集やコミュニケーションを可能にしていることを学びます。機器が基盤となり、その上でツールが機能することで目的が達成されるという関係性を理解させます。



スライド 19　SNS の具体例

②指導を行う際の留意点
機能を説明する前に、「知りたいことがあるときはどうするか」「離れた相手に伝えるには何を使うか」と問いかけ、具体的な利用場面を想起させます。出された意見を整理しながら、スマートフォンなどの機器と検索やメールといったツールを結び付けて理解させます。
理解が難しい場合は、「機器は道具、ツールはその道具を使ってできること」といった比喩を用いることで、役割の違いを捉えやすくなります。
SNS について扱う際は利便性だけでなく、多くの人に情報が伝わる特徴があることにも触れ、使い方を考える視点へとつなげます。発言に迷う様子が見られる場合には、「誰に伝わるのか」を具体的に想像させることで理解を支えます。

(4)学習の成果と評価
本節の学習を通じて、生徒がスマートフォンやコンピューターなどのデジタル機器を具体的に挙げられるようになる知識・技能の習得を目指します。
また、機器とツールの違いを理解し、「何を使って何をしているのか」を説明できる思考・判断・表現力の育成も重視します。
最終的には、目的に応じて適切な機器やツールを選択しようとする主体的な態度を養うことを評価の観点とします。

(5)参考 URL
① 情報通信白書
出典元：総務省
https://www.soumu.go.jp/johotsusintokei/whitepaper/

日本における ICT やデジタル機器の普及状況について、公的データをもとに解説しています。デジタル機器が社会基盤となっていることを理解する参考になります。

② GIGA スクール構想
出典元：文部科学省
https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/zyouhou/index.htm
学校におけるタブレットやクラウド活用の背景を説明しています。機器とツールが教育現場でどのように活用されているかを具体的に知ることができます。

③ OS とファイルシステム
出典元：京都大学 情報環境機構
https://www.info.bun.kyoto-u.ac.jp/02/win1.html
OS（基本ソフトウェア）の役割や、情報を保存・管理する仕組みについて分かりやすく解説しています。デジタル機器の内部でどのように情報が処理されているかを理解する際の参考になります。

④ 情報セキュリティ啓発資料（こども向け）
出典元：IPA（情報処理推進機構）
https://www.ipa.go.jp/security/kokokara/
デジタル機器やインターネットの仕組みと安全な使い方を、教育目的で解説しています。情報処理という視点から機器の役割を理解できます。

⑤ ネット安全教材（IPA 公的資料）
出典元：IPA（情報処理推進機構）
https://www.ipa.go.jp/security/sec-tools/ug65p9000000noty-att/netanzen-kougiyouryou_public.pdf
IPA が提供するネット安全教育用の教材で、インターネットの仕組みや安全な使い方、トラブル回避の基礎知識をまとめています。デジタル機器やツールを安心して使うための基本的な視点を補強する際の参考資料となります。

⑥ デジタルツールの基礎と選び方
出典元：DX 東北 magazine
https://dx-tohoku.jp/magazine/dx-basics/intro-and-how-to-choose-digital-tools.html
デジタルツールの基本的な考え方や、用途に応じたツールの選び方をわかりやすく解説し

ています。ツールの機能や役割を整理する際の参考になります。

⑦ 地域におけるデジタル活用と安全指標
出典元：総務省
https://www.soumu.go.jp/main_content/000700786.pdf
総務省が公表するデジタル社会における利活用の動向や安全に関する指標をまとめた資料です。社会全体でのデジタル機器・ツールの利用実態や安全配慮に関する情報を整理する際の参考資料となります。

指導用ガイド：デジタル社会を知る
第１章 第３節「デジタル社会で大切なこと」

(1)学習目標と単元の概要
本節は、デジタル社会の中で安全かつ適切に生活するために大切な視点を育てることをねらいとしています。健康への配慮や生活とのバランスに目を向けながら、「どのようにデジタルと関わるか」を自ら考える姿勢へと導きます。授業では、日常生活を振り返りながら複数の行動例を比較し、それぞれの良さや課題に気づく活動を通して学習を進めます。望ましい行動を一方的に示すのではなく、自分の生活に引き寄せて考えることで、適切な使い方を判断しようとする態度を育てます。

(2)指導の要点と基本方針
指導にあたっては、次の要点を意識させます。まず、デジタル機器を使っている日常の場面を振り返らせ、自分の生活との関係から導入します。使用している時間や場面を具体的に思い浮かべさせることで、学習内容を現実の行動と結び付けて捉えられるようにします。その際、「どちらがよいか」をすぐに示すのではなく、複数の行動例を比べさせることが重要です。「続けて使う場合」と「休憩を取る場合」などを対比し、それぞれにどのような影響があるかを考えさせます。また、「これからどのような使い方をしたいか」と問いかけ、自分の行動に置き換えて考えさせます。考えがまとまりにくい場合は、「どんなときに困るか」「どうすれば無理なく使えるか」といった問いを示し、生活の場面に立ち返って考えるよう促します。

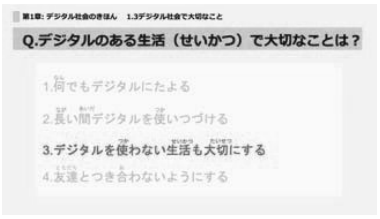
(3)具体的な指導の展開
デジタル社会で大切なこと(1.3.1) スライド 22～24
①概要
デジタル機器のある生活を振り返りながら、安全に使うことや健康に配慮することの大切さについて学びます。複数の行動例を比較することで、便利さだけでなく使い方を考える必要があることに気づかせます。



スライド 23　安全な使い方の例

②指導を行う際の留意点
導入では、「毎日の生活の中でどのようなときにデジタル機器を使っているか」を問いかけ、具体的な利用場面を想起させます。身近な経験から考えることで、学習内容を自分事として捉えやすくなります。行動例を扱う際は、すぐに良し悪しを示すのではなく、「続けて使うとどうなるだろうか」「休憩を取るとどのような違いがあるだろうか」と問いかけ、使い方による変化に目を向けさせます。禁止や制限を強調するのではなく、適切な距離を考えることが重要であると理解させます。意見が出にくい場合には、「目が疲れたことはあるか」「長く使ったあとにどんな感じがしたか」など、身体の感覚に目を向けさせることで考えを引き出します。

健康や生活とのバランス(1.3.2) スライド 25～26
①概要
デジタル機器との関わり方を見直し、生活全体のバランスを考える視点を持たせます。デジタルを使う時間と使わない時間の双方に目を向けながら、自分に合った使い方を考えさせます。



スライド 26　生活とのバランスを考える場面

②指導を行う際の留意点
「デジタルを使わない時間にはどのような過ごし方があるか」と問いかけ、友人との交流や身体を動かす活動などを挙げさせます。デジタルか非デジタルかを対立的に捉えるのではなく、どちらも生活に必要であることを押さえたうえで、組み合わせ方を考えさせます。
まとめの場面では、「これから意識したいこと」を短い言葉でもよいので表現させます。考えが定まらない様子が見られる場合には、「どんなときに休憩するとよいか」など具体的な場面を示し、行動を想像しながら整理できるよう支援します。

(4)学習の成果と評価
本節の学習を通じて、生徒がデジタル社会において大切な視点を具体的に挙げられるようになることを目指します。
また、複数の行動例を比較しながら自分の考えを形成し、その理由を説明できる思考・判断・表現力の育成を重視します。
最終的には、便利さに流されるのではなく、自分の生活に合った使い方を選択しようとする主体的な態度を養うことを評価の観点とします。

(5)参考 URL
① 子どものインターネット・スマートフォンの利用実態
出典元：文部科学省
https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/150/shiryo/_icsFiles/afieldfile/2019/06/06/1417770-008_2_1.pdf
文部科学省が実施した調査資料で、児童生徒におけるスマートフォン・インターネットの利用実態や利用時間、生活との関係について示しています。生活リズムや健全なつきあい方を考える際の客観データとして参考になります。

② 子どもの「からだ」とスマホ・ゲームの関係
出典元：厚生労働省『KENNETH(けんネット)』

https://kennet.mhlw.go.jp/information/information/sensory-organ/s-02-001
スマートフォンやゲーム機の使用が子どもの身体、とくに目や感覚器官の健康に与える影響について解説しています。視力や生活リズムに関する具体的な注意点が書かれており、デジタル機器との付き合い方を考える際の資料として活用できます。

③ 青少年のインターネット利用と生活実態調査 2021
出典元：一般財団法人 児童育成協会
https://www.mcf.or.jp/temp/seisyonenhoukoku2021.pdf
青少年(児童・生徒)のインターネット利用やスマホ・ゲームの使用時間、生活リズムとの関係をまとめた調査資料です。

④ インターネット利用環境調査(青少年)
出典元：内閣府青少年育成施策本部
https://www.cfa.go.jp/assets/contents/node/basic_page/field_ref_resources/9a55b57d-cd9d-4cf6-8ed4-3da8efa12d63/a8673c90/20250225_policies_youth-kankyou_internet_research_results-etc_14.pdf
青少年のインターネット利用状況に関する最新調査結果をまとめた PDF 資料です。利用時間や影響、生活習慣との関連などのデータが掲載されており、インターネットの使い方と生活リズムについて客観的に理解する際の資料として役立ちます。

⑤ ゲームと生活リズムに関するレポート
出典元：あんしんゲーム・プロジェクト
https://anshin-game.jp/promise/report/250708.html
ゲームの利用時間や利用者の行動傾向についてまとめたレポートです。プレイ時間・生活リズム・休憩の取り方に関する調査結果が書かれており、デジタル機器と日常生活との関わりを考える資料として参照できます。

第２章　インターネット

― 世界とつながる仕組みへの理解を深めることを目指します ―

本章では、インターネットの基本的な仕組みや役割を理解し、日常生活とどのように結び付いているかに気づくことを目的とします。生徒にとって身近な存在である一方、その働きは見えにくいため、具体的な利用場面を手がかりにしながら理解を深めます。

指導にあたっては、「何ができるか」だけでなく、「どのようにつながっているのか」という視点を持たせることを重視します。検索や情報収集などの体験と結び付けることで、インターネットが世界へ広がる入り口であることを実感できるようにします。

また、利便性だけに目を向けるのではなく、安心して活用するために必要な行動にも段階的に触れていきます。ただし、不安を与える指導にならないよう配慮し、「どのように使えばよいか」という前向きな理解を支えます。

本章は、第３章以降の情報活用の学習を支える基盤として位置付けています。

本章の構成

本章は次の２節で構成しています。

第１節　インターネットのきほん
第２節　インターネットの安全について

(1)学習目標と単元の概要
本節では、インターネットが世界中の情報や人とつながる仕組みであることを理解し、その基本的な役割に気づくことをねらいとしています。生徒にとってインターネットは身近な存在ですが、その仕組みは目に見えにくいため、具体的な利用場面を手がかりに理解を深めます。検索によって知りたい情報をすぐに調べられることや、離れた場所の出来事にも触れられることを取り上げ、生活との結び付きを実感できるようにします。また、利用には回線や機器が必要であることにも触れ、見えないところで社会が支えられている点に目を向けさせます。これらの学習を通して、便利さだけでなく、その基盤となる働きに関心を持つ姿勢を育てます。

(2)指導の要点と基本方針
指導にあたっては、まず生徒の経験を起点にします。「調べものをしたことがあるか」「動画を見たことがあるか」と問いかけ、すでにインターネットを活用していることに気づかせます。そのうえで、「どのように世界とつながっているのだろうか」と問いかけ、目に見えない仕組みへの関心を引き出します。「回線を通って情報が届く」といったイメージで示し、難しい場合は「手紙が届く」「電話がつながる」といった経験に置き換えて説明します。また、「インターネットがあると何ができるのか」を挙げさせ、ある場合とない場合を比較することで価値や役割を実感させます。なお、本節では安全面に踏み込みすぎず、仕組みと利便性の理解を優先し、安全な活用は第２節へとつなげます。

(3)具体的な指導の展開
インターネットの仕組み(2.1.1)29～30
①概要
インターネットは回線によって世界中とつながり、離れた場所にある情報にもアクセスできる仕組みであることを学びます。



スライド　29　インターネットの仕組み

②指導を行う際の留意点
インターネットの仕組みは目に見えないため、生徒にとって理解しにくい内容になりやすい点に留意します。専門的な説明に偏るのではなく、「離れた場所とつながることができる仕組みである」という全体像を捉えることを優先します。
指導の際は、図やイラストを用いながら視覚的に示すことが効果的です。「道路を通って目的地に向かうように、回線を通って情報が届く」といった身近な例に置き換えることで理解を支えます。細かな技術用語を覚えさせる必要はなく、「世界とつながっている」という認識を持つことを重視します。

インターネットの使い方(2.1.2)31～34
①概要
検索サービスなどを例に挙げながら、知りたい情報を調べることができるというインターネットの基本的な活用方法を学びます。



スライド　32　インターネットの基本的な使い方

②指導を行う際の留意点
本項目では、操作技能の習得を目的とするのではなく、「調べると分かる」という体験を通してインターネットの有用性を実感させることを重視します。生徒が関心を持てるテーマを設定し、主体的に取り組めるよう支援します。
発言に迷う場合は、「知りたいことがあるときはどうするか」と問いかけ、生活場面を想起させます。なお、安全な利用や情報の適切性については第２節で扱う内容であるため、本節では利便性と基本的な使い方の理解に焦点を当てます。

(4)学習の成果と評価
インターネットが世界とつながる仕組みであることを理解し、その役割を説明できることを目指します。
また、インターネットによって可能になることに関心を持ち、学習や生活に活かそうとする態度を評価します。

(5)参考 URL
① インターネットって何？(こども向け説明)
出典元：総務省「白書 Kids」
https://www.soumu.go.jp/hakusho-kids/life/what/what_03.html
インターネットとは何かを、子ども向けにやさしく説明しているページです。ネットがどうつながって世界と情報をやり取りしているかの基礎を理解するのに役立ち、インターネットの基本的な仕組みを学ぶ際の入門として使えます。

② オンライン学習・インターネットでできること
出典元：Miraii(ミライイ)
https://miraii.jp/online-learning-1
インターネットを使った学習スタイルや、その具体例について解説しているページです。ネットを通じて学ぶこと＝調べる・学習コンテンツを利用する・双方向の授業など、インターネットで何ができるかを生活や学びの視点で示しています。

③ インターネットの基礎(仕組みと活用)
出典元：文部科学省
https://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/__icsFiles/afieldfile/2018/08/13/1408132_00_0_full.pdf

インターネットの仕組み・技術・活用方法について、基礎から丁寧にまとめられた文部科学省の資料です。仕組みや検索の働き、情報のやりとりについて理解を深める際の参考になります。

④ 国民のためのサイバーセキュリティサイト(基本サービス)
出典元: 総務省
https://www.soumu.go.jp/main_sosiki/cybersecurity/kokumin/basic/service/01/
総務省が提供する「国民のためのサイバーセキュリティサイト」の基本サービス紹介ページで、インターネット上で利用される代表的なサービスとその仕組みについて解説しています。インターネットの働きや日常的な通信・サービスの理解を深める際の補助資料として参考になります。
⑤ 図解・インターネットの仕組み(Kids Gakken)
出典元: 学研キッズネット
https://kids.gakken.co.jp/himitsu/library200/
学研キッズネットの図解ページで、インターネットの基本的なしくみや情報がどうやって届くかをわかりやすく図示しています。児童生徒向けに視覚的に理解しやすい内容です。

⑥ インターネットで情報を送る仕組み(こども向け)
出典元: 総務省「白書 Kids」
https://www.soumu.go.jp/hakusho-kids/life/what/what_12.html
総務省「白書 Kids」のページで、インターネットで情報を送ったり受け取ったりする仕組みについて、児童生徒向けに説明しています。インターネットがどのように情報を届けるかという観点から、基盤となる働きを理解する際の参考資料となります。

⑦ インターネットって何？(児童向け説明)
出典元: 行橋市キッズサイト
https://www.city.yukuhashi.fukuoka.jp/site/kids/13618.html
インターネットとは、世界中のコンピュータなどの通信機器をつなぐネットワークであり、情報を探したり、発信したり、コミュニケーションをしたりできる仕組みであることを説明しています。児童向けの平易な文章でインターネットの役割を整理する際の参考資料となります。

(1)学習目標と単元の概要
本節では、インターネット利用時に起こり得る困りごとに気づき、安全に活用するための行動を理解することをねらいとします。インターネットは便利である一方、使い方によってはトラブルにつながる可能性があり、個人情報の流出や不適切なやり取りなど身近な場面を想定して学習します。授業では、「どのように行動すれば安心して使えるか」という視点を中心に、生徒自身が安全な使い方を考える過程を重視し、判断に迷ったときには周囲に相談することの大切さにも触れます。

(2)指導の要点と基本方針
指導にあたっては、危険性を過度に強調しないよう配慮することが重要です。不安を与えるのではなく、「どのようにすれば安心して使えるか」という前向きな理解を促します。具体的な事例を示し、「このときどのように行動するとよいだろうか」と問いかけながら、生徒自身が考える過程を大切にします。複数の選択肢を比較させることで判断する視点を育てます。失敗を責める指導にならないよう留意し、トラブルは誰にでも起こり得ることを伝えます。困ったときには相談できるという安心感を持たせ、「迷ったときに立ち止まる」「一人で判断しない」といった姿勢の大切さを確認します。

(3)具体的な指導の展開
パスワードは大切に(2.2.1)35～36
①概要
パスワードは情報や個人データを守るための重要な役割を持つことを理解し、自分の情報を安全に管理する必要があることを学びます。パスワードが他人に知られてしまうと、自分になりすまして操作される可能性があるなど、具体的なリスクにも目を向けさせます。



スライド 35　パスワード管理の大切さを説明する

②指導を行う際の留意点
指導では、パスワードを「自分だけが使える鍵」として捉えさせることが効果的です。鍵を他人に渡してしまった場合にどのようなことが起こるかを想像させることで、その重要性を実感しやすくなります。
また、「なぜ教えてはいけないのか」を理由とともに理解させ、単なる約束事としてではなく、自分を守るための行動として定着させることが重要です。安全に管理する意識を持たせるとともに、安易に共有しない態度を育てます。

インターネットを使うときに注意すること(2.2.2)37～40
①概要
インターネットを利用する際には、情報の伝え方や相手とのやり取りに注意が必要であることを理解し、安全につながる行動について考えます。利用場面を具体的に想定しながら、不用意な発信ややり取りがトラブルにつながる可能性があることに気づかせます。



スライド 38　サイトの安全性の確認

②指導を行う際の留意点
「してはいけないこと」を並べるのではなく、「どうすれば安心して使えるか」という視点で整理することが重要です。例えば、個人情報をむやみに伝えないことや、知らない相手とのやり取りには慎重になることなどを具体的な場面と結び付けて考えさせます。
さらに、「もし自分だったらどうするか」と問いかけることで、実際の行動を想像しながら判断できるよう支援します。困ったときには一人で抱え込まず、家族や教員など周囲に相談することが大切である点もあわせて押さえ、早めに助けを求める姿勢を育てます。

(4)学習の成果と評価
インターネットの利用に伴って起こり得る困りごとを理解し、安全に使うために必要な行動を具体的に挙げられることを目指します。
また、迷ったときに立ち止まって考えたり、周囲に相談しようとしたりする態度が見られるかを評価の観点とします。知識の定着だけでなく、安全に活用しようとする意識の高まりを重視します。

(5)参考 URL
① インターネットとのつきあい方(基礎)
出典元: 政府広報オンライン(国民向け広報サイト)
https://www.gov-online.go.jp/useful/article/201303/3.html
インターネットとの付き合い方について、子どもから大人まで基本となる生活上の注意や

ルール、利用時の心得をまとめた解説記事です。ネットの使い方や注意点を生活の中で理解する際の補助資料として活用できます。

② 青少年のインターネット利用環境に関する調査
出典元：総務省
https://www.soumu.go.jp/main_content/000872813.pdf
青少年のインターネット利用実態やトラブル事例、利用時間の変化、トラブルにあった場合の対応などがまとめられている公式 PDF 資料です。データや具体例が豊富で、ネット利用に関する安全教育や事例学習の資料として活用できます。

③ 子ども向けプライバシー保護ガイド
出典元：Lycorp プライバシーセンター
https://privacy.lycorp.co.jp/ja/kidsprivacy/
子どもがインターネットやデジタルサービスを使うときに、個人情報やプライバシーをどのように守るべきかをやさしく説明しているページです。個人情報の取り扱い方、適切な設定、情報を守る意識を育てる視点が整理されており、ネット利用におけるプライバシー保護を考える際の参考になります。

④ 子どものネット利用と生活習慣
出典元：ベネッセこども基金
https://benesse-kodomokikin.or.jp/column/2022/0222922.html
子どものインターネットやスマートフォンの利用に関する生活面での影響や、家族で話し合うポイントについて解説しています。利用時間や使いすぎによる日常行動への影響、健全な使い方のアイデアなどが書かれており、ネット利用と生活習慣のバランスを考える際の参考になります。
⑤ ネットトラブル事例集（＋ネット）
出典元：総務省「インターネットを正しく使うために」
https://www.soumu.go.jp/use_the_internet_wisely/trouble/case/plus_net.html
総務省が提供する「ネットトラブル事例集」のページで、実際に起きたさまざまなインターネットのトラブル例を紹介しています。詐欺、個人情報漏洩、誤送信などの事例が具体的に示されており、リアルな危険と対応について理解を深めるための資料として役立ちます。

⑥ 学校での情報モラル指導
出典元：文部科学省

https://www.mext.go.jp/zyoukatsu/moral/index.html
文部科学省が提供する情報モラル教育に関するページです。学校現場での安全なインターネット利用や情報の扱い方について、教育的な視点から整理されており、安全な活用行動を考える際の補助資料となります。

⑦ サイバー犯罪の基礎と事例
出典元：警察庁
https://www.npa.go.jp/policies/budget/review/h30/sankoushiryou_cyber.pdf
警察庁が取りまとめたサイバー空間における犯罪や被害の基礎、関連事例を収録した資料です。インターネット利用に伴うトラブルのうち、犯罪行為につながるケースを理解し、防止策を考える際の参考資料となります。

第３章　デジタル情報のみかた

― 情報を正しく受け止め、判断する力を育てることを目指します ―

本章では、インターネットやソーシャルメディアを通して日々触れている情報に目を向けながら、その内容をどのように受け止めればよいかについて理解を深めます。情報をそのまま信じるのではなく、立ち止まって考える視点を持つことの大切さに気づくことを目的とします。

指導にあたっては、うそのニュースや思い込みにつながる情報にも触れながら、「正しい情報をえらぶ」「事実と意見を区別する」「情報の出どころを確かめる」といった基本的な見方を段階的に身に付けられるようにします。本章を通して、情報に振り回されるのではなく、自ら判断しようとする態度を養います。

本章の構成

本章は次の３節で構成しています。

第１節　正しい情報をえらぶコツ
第２節　正しい情報か知るには

(1)学習目標と単元の概要
本節では、インターネットやソーシャルメディアを通して日常的に触れている情報の中から、何が正しいのかを考える視点を育てることをねらいとしています。情報があふれる現代では、内容をそのまま受け入れず、立ち止まって考える姿勢が重要です。情報は身近ですが、そのすべてが正しいとは限りません。誤った情報やうそのニュースが広まることに気づかせ、見極める必要性を理解させます。授業では、「うそ？」「ほんと？」と問いかけながら情報を比較し、正しい情報を選ぶために何が大切かを考えさせ、自ら判断しようとする態度の形成を目指します。

(2)指導の要点と基本方針
指導にあたっては、まず生徒が日常的に多くの情報に触れていることに気づかせることが重要です。ニュースや動画、SNS など身近な例を取り上げ、情報が生活の一部であることを実感させます。その際、「どれが正しいか」をすぐに示すのではなく、「本当だろうか」と考える過程を大切にします。判断の根拠を問い、「なぜそう思ったのか」と問い返すことで、考えを言語化できるよう支援します。また、多くの人が発信できる環境では誤った情報も広まりやすいことに触れ、「多くの人が言っている＝正しい」とは限らないことに気づかせます。「疑う」とは否定ではなく、正しく理解するために確かめる行動であると伝えます。

(3)具体的な指導の展開
うそのニュースに注意(3.1.1)43～44
①概要
うそのニュースが存在することを知り、情報を見たときにすぐ信じるのではなく、きちんとしたニュースで確かめることの重要性を学びます。情報の見出しや印象だけで判断するのではなく、内容を確かめる姿勢を身に付けることを目指します。



スライド 43　インターネットの情報が正しいか確認する必要性を説明する

②指導を行う際の留意点
導入では、「驚いたニュース」や「気になった話題」を挙げさせ、情報に触れた経験を引き出します。そのうえで、「本当に起きたことなのだろうか」と問いかけ、情報を見極める必要性に気づかせます。
指導の際は、誤情報にだまされないことだけを強調するのではなく、「確かめれば安心できる」という前向きな理解につなげることが重要です。例えば、複数の情報源を見ることや、信頼できる媒体で確認することなど、具体的な行動を示すと理解しやすくなります。
また、印象の強い言葉や画像に影響されやすい点にも触れ、落ち着いて内容を読むことの大切さを伝えます。判断に迷う経験そのものが、情報を見極める力の基礎となることを押さえます。

ソーシャルメディアとは何か？(3.1.2)45～46
①概要
ソーシャルメディアの特徴を理解し、多くの人が情報を発信し共有できる環境の中で情報を受け取っていることに気づかせます。便利さと同時に、情報の正確さを自分で判断する必要があることを学びます。



スライド 45　ソーシャルメディアについて説明する

②指導を行う際の留意点
まず、身近なソーシャルメディアを例に挙げ、「どのようなときに利用しているか」を考えさせます。友人との交流や情報収集など、生活と結び付けて理解させることで学習内容を具体化できます。
そのうえで、「誰でも発信できる」という特性に目を向けさせます。情報は必ずしも専門家が発信しているとは限らないことを理解させ、「なぜこの情報を信じたのか」と振り返らせることで受け手としての視点を育てます。
また、共感や話題性によって情報が急速に広がることにも触れます。多くの人に共有されている情報ほど正しいと感じやすい傾向があるため、「広がっている理由」と「内容の正確さ」は別であることを丁寧に整理します。
最後に、ソーシャルメディアは危険なものとして扱うのではなく、正しく理解し適切に活用することが大切であると伝えます。利便性と注意点の双方に目を向けることで、バランスの取れた見方を育てます。

(4)学習の成果と評価
本節の学習を通して、生徒が情報を見たときに「本当だろうか」と立ち止まって考えようとする姿勢を持つことを目指します。
また、正しい情報をえらぶためには確かめることが大切であると理解し、その理由を自分の言葉で説明できる思考・判断・表現力の育成を重視します。
最終的には、情報をそのまま受け入れるのではなく、根拠を意識しながら判断しようとする主体的な態度が見られるかを評価の観点とします。

(5)参考 URL
① フェイクニュースと SDGs の関係
出典元：朝日新聞 SDGs＋記事
https://www.asahi.com/sdgs/article/15913617
「SDGs(持続可能な開発目標)」の視点から、情報の正しさや SNS で広がる虚偽情報の問題について解説している記事です。真偽を見極めることが社会全体にも影響することを示しており、うそのニュースや情報リテラシーについて考える際の補足資料として使えます。

② フェイクニュースの見分け方(総務省)
出典元：総務省
https://www.soumu.go.jp/use_the_internet_wisely/special/fakenews/
総務省が提供する「インターネットを正しく使うためのガイド」内のページで、フェイクニュースの特徴や見分け方について解説しています。情報の真偽を判断する視点や具体的なチェックポイントを確認する際の参考資料となります。

③ フェイク情報・偽情報の注意喚起
出典元：内閣官房 偽情報対策ポータル
https://www.cas.go.jp/jp/seisaku/nisejouhou_portal/keihatsu.html
内閣官房が運営する偽情報対策ポータルのページで、フェイク情報(偽情報)やその影響について整理し、注意すべきポイントや警戒事項を示しています。情報の真偽判断や誤情報に対する注意喚起として扱う際の参考資料となります。
④ ファクトチェックセンター ― Fact-Checking のしくみ
出典元：一般社団法人 FactCheck センター
https://www.factcheckcenter.jp/fact-checking/
ファクトチェックとは何か、その目的やプロセス、実際にどのように真偽を検証するかを紹介しているページです。情報の信頼性を検証する考え方や手順について扱う際の参考資料となります。

⑤ メディアリテラシー育成の手引き
出典元：文部科学省
https://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/detail/_icsFiles/afieldfile/2016/06/07/1368445_2.pdf
メディアリテラシーの育成に関する考え方や具体的な学習活動の例をまとめた文部科学

省の資料です。情報の真偽を判断する力や根拠に基づいて情報を扱う態度を育てる際の参考資料として活用できます。

⑥ 正しい情報の見分け方・ICT 活用の視点
出典元：文部科学省
https://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/afieldfile/2018/08/07/1369631_6_1.pdf
文部科学省が公開する教材資料で、情報の見方・ICT を活用した情報収集・判断の視点について整理されています。情報を評価し、正しさを見極める力を育てる際の補助資料として活用できます。

(1)学習目標と単元の概要

本節では、インターネット上の情報を受け取る際に、それが正しいかどうかを判断するための基本的な視点を身に付けることをねらいとしています。情報をそのまま信じるのではなく、根拠をもとに考える姿勢を育てます。現代では多様な情報が瞬時に届き、事実と意見が混在している場面も少なくありません。印象の強い情報ほど心に残りやすいため、冷静に内容を捉える視点が重要です。本節ではその違いに気づきながら情報を読み取る力を養います。授業では具体例を比較し、「これは事実か」「これは意見か」と考える活動を通して判断の根拠を言葉にする経験を重ねます。最終的には、感情に流されず自分で考えようとする態度の形成を目指します。

(2)指導の要点と基本方針

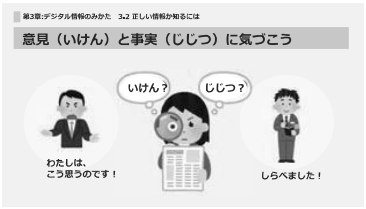
指導にあたっては、まず情報にはさまざまな表現が含まれていることに気づかせることが重要です。同じ出来事でも伝え方によって印象が変わることを理解させ、情報の読み取り方に意識を向けさせます。その際、「どちらが正しいか」をすぐに示すのではなく、判断の理由を考えさせる過程を重視します。「どこが事実か」「どの部分が考えや感想か」と問いかけ、情報を分けて捉える視点を育てます。また、強い感情が判断に影響することに触れ、一度立ち止まって考える姿勢の大切さを伝えます。さらに、「疑う」とは否定ではなく、正しく理解するために確かめる行動であることを押さえます。

(3)具体的な指導の展開

意見と事実に気づこう(3.2.1)49～52

①概要

情報の中には、客観的に確かめられる事実と、個人の考えや感想である意見が含まれていることを理解します。両者の違いに気づくことで、情報を整理しながら受け取る力を養います。



スライド 50　意見と事実の整理

②指導を行う際の留意点

導入では、短い文章を提示し、「どの部分が事実か」「どの部分が意見か」を考えさせます。例えば、「今日は雨です」と「雨の日はかなしいです」のように対比させることで、違いを直感的に理解しやすくなります。

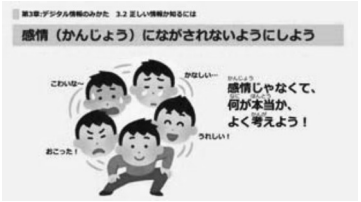
指導では、事実は確認できる情報であり、意見は人によって感じ方が異なるものであることを整理します。どちらが良い・悪いということではなく、性質が異なることを理解させることが重要です。

また、判断に迷う場合には、「確かめることができるか」「人によって変わるか」といった視点を示すと考えやすくなります。情報を読むときに自然とこの視点が働くよう、繰り返し確認します。

感情に流されないようにしよう(3.2.2)53～54

①概要

情報に触れたときに生まれる感情が判断に影響することを理解し、何が本当なのかを落ち着いて考える姿勢を身に付けます。感情と情報を切り分けて捉える視点を育てることを目的とします。



スライド 54　感情に流されない判断

②指導を行う際の留意点

まず、「ニュースを見てどんな気持ちになったことがあるか」と問いかけ、感情と情報の結び付きを意識させます。嬉しい、怖い、驚いたなどの反応を共有することで、誰にでも起こる自然な働きであると理解できます。

そのうえで、感情が強く動いたときほど冷静な判断が難しくなることに触れます。「本当にそうなのか」「他の情報はないか」と考える習慣を持つことが大切であると伝えます。

また、情報を信じる前にできる行動として、他の情報源を確かめることや、家族や教員など周囲に相談することを示します。感情を否定するのではなく、「感じること」と「判断すること」は分けて考える必要がある点を丁寧に整理します。

最終的には、感情に左右されるのではなく、根拠をもとに判断しようとする態度を育てます。

(4)学習の成果と評価

本節の学習を通して、生徒が情報の中に事実と意見が含まれていることに気づき、それぞれを区別しながら受け取ろうとする姿勢を持つことを目指します。

また、情報に触れた際に感情だけで判断するのではなく、「何が根拠なのか」を考えようとする思考・判断・表現力の育成を重視します。

最終的には、情報を多角的に捉え、落ち着いて判断しようとする主体的な態度が見られるかを評価の観点とします。

(5)参考 URL

①「情報の判断力を育てるための思考法」
出典元：GLOBIS 知見録(グロービス)
https://globis.jp/article/58093

情報があふれる現代において、どうやって信頼できる情報を選ぶのかについて解説している記事です。事実と意見を見分け、情報の背景や意図を読み取る思考のポイントが紹介されています。第３章第２節「正しい情報か知るには」で扱う情報の判断力の基本を学ぶ際の補助資料として使えます。

② 情報の読み解きのポイント(NHK 教育アーカイブ)
出典元：NHK 先生向けアーカイブ
https://www.nhk.or.jp/archives/teachers-l/list/pdf/2022014_point.pdf
NHK が教育現場向けに提供している PDF 資料で、インターネットやメディア情報を読み解く際のポイントや考え方がまとめられています。事実と意見の違い、情報の根拠を判断する視点、検索時の注意点などが具体的に整理されており、第３章第２節「正しい情報か知るには」で扱う情報リテラシーの基礎学習に役立ちます。

③ ネットの違法・有害情報に関する調査資料
出典元：総務省
https://www.soumu.go.jp/main_sosiki/joho_tsusin/policyreports/chousa/internet_illegal/pdf/080227_2_si4.pdf
インターネット上の違法・有害情報やトラブルの実態を調査した PDF 資料です。違法情報の種類や被害例、利用者が注意すべきポイントなどが具体的にまとめられており、情報の信頼性や取扱いに関する理解を深める際に役立つ資料です。

④ フェイクニュースと情報の見極め(NIKKEI コラム)
出典元：日経 BookPlus
https://bookplus.nikkei.com/atcl/column/041500053/032300151/
日経のコラムで、情報の信頼性やフェイク情報の見極め方について解説している記事です。「何がフェイクで何が本当なのか」を論理的に判断するポイントや、情報の根拠を意識する必要性が示されています。第３章第２節「正しい情報か知るには」で扱う、事実と意見・根拠の見分け方の理解に役立つ内容です。

⑤ インターネット情報の見方・判断のポイント(こども向け)
出典元：総務省「白書 Kids」
https://www.soumu.go.jp/hakusho-kids/safety/prepare/literacy/literacy_04.html
インターネット上の情報をどのように正しく読み解くかについて、子ども向けに分かりやす

く解説しているページです。情報の信頼性を判断するポイントや、「事実」と「意見」を区別する視点などが整理されています。第 3 章第 2 節「正しい情報か知るには」で扱う情報リテラシーの基礎学習に非常に役立つ内容です。

⑥ メディア・情報リテラシー教育論文
出典元：日本教育メディア学会
https://jaems.jp/wp-content/uploads/2024/03/ronshu_56_2023_no2.pdf
日本教育メディア学会が公開する論文集の 1 編で、メディア・情報リテラシー教育の理論や実践についてまとめられています。情報の事実・意見の区別や根拠に基づく判断力の育成について専門的な視点から整理されており、高等段階の理論理解や教員研修の参考資料として活用できます。

⑦ 子どものインターネット行動と安全意識調査
出典元：JFE 子ども応援団
https://www.jfecr.or.jp/wp-cms/wp-content/uploads/2023/11/chosa70.pdf
JFE 子ども応援団が実施した調査資料で、子どもたちのインターネット利用の実態や安全意識、トラブル経験などについてまとめられています。利用時間や保護者との関わり、情報への向き合い方などが具体的なデータとして示されており、子どもの実態を踏まえて情報リテラシー教育を考える際の参考資料となります。

第 4 章　オンラインコミュニケーション

― 相手を意識した関わり方を身に付けることを目指します ―

本章では、インターネットを通じたコミュニケーションの特徴を理解し、対面とは異なる環境の中でどのように人と関わればよいかを考えることを目的とします。生徒にとって身近なやり取りを手がかりにしながら、オンライン上の行動が相手に与える影響に目を向けさせます。

指導にあたっては、「伝える側」と「受け取る側」の双方の立場を想像させることを重視します。文字だけのやり取りでは意図が正しく伝わらない場合があることや、何気ない言葉が相手を傷つけてしまう可能性があることに気づかせ、状況に応じて適切に判断する視点を育てます。

また、オンラインでのトラブルを特別な出来事として扱うのではなく、誰にでも起こり得る身近な問題として捉えさせることが重要です。安心してコミュニケーションを行うためにどのような行動が望ましいのかを考えさせ、思いやりを持って関わろうとする態度の形成を目指します。

本章は、第 1 章から第 3 章までで身に付けた知識や判断の視点を基盤として、デジタル社会の中で他者と適切に関わる力を育てる章として位置付けています。

本章の構成

本章は次の 2 節で構成しています。

第 1 節　オンラインでのコミュニケーション
第 2 節　ネットでのいやがらせ

(1)学習目標と単元の概要
本節では、インターネットを介したコミュニケーションの特徴を理解し、相手を意識しながら適切にやり取りを行うための視点を身に付けることをねらいとしています。対面での会話とは異なり、文字を中心としたやり取りでは感情や意図が十分に伝わらないことがあるため、伝え方を工夫する必要があることに気づかせます。
オンラインでのコミュニケーションは、時間や場所にとらわれずに連絡を取ることができるなど多くの利点がありますが、その一方で、何気ない言葉が誤解を招いたり、意図しない形で情報が広がったりする可能性もあります。本節では、こうした特性を理解しながら、安全で円滑なやり取りを行うためにどのような点に気を付ければよいかを考えます。
授業では、生徒にとって身近なメールやチャットを題材に取り上げ、相手がどのように受け取るかを想像する活動を通して学習を進めます。自分の発信が相手に与える影響を考える経験を重ねることで、よりよい関係を築こうとする態度の形成を目指します。

(2)指導の要点と基本方針
指導にあたっては、まず生徒が日常生活の中でオンラインによるやり取りを行っていることに目を向けさせることが重要です。連絡手段として自然に利用しているからこそ、その特徴を改めて整理し、対面での会話との違いに気づかせます。表情や声の調子が伝わらない環境では、同じ言葉であっても冷たく感じられたり、意図とは異なる意味に受け取られたりすることがある点を丁寧に押さえます。
また、「何をしてはいけないか」を強調する指導にならないよう配慮し、「どのようにすれば気持ちよくやり取りができるか」という前向きな視点を大切にします。望ましい伝え方を考える過程を通して、生徒が自ら判断できるよう支援することが求められます。
さらに、オンライン上で扱う情報は一度送信すると完全に取り消すことが難しい場合があることにも触れ、自分の行動がどのような影響を持つのかを想像する姿勢を育てます。不安を与えるのではなく、落ち着いて確認しながら行動することが安心して活用することにつながると理解させることが重要です。

(3)具体的な指導の展開
メールやチャットの使い方(4.1.1)59～61
①概要
メールやチャットは、相手とすぐに連絡を取り合うことができる便利なコミュニケーション手段であることを理解します。一方で、対面の会話とは異なり、表情や声が伝わらないため、言葉の選び方によって相手に与える印象が大きく変わる可能性があることに気づかせます。伝えたい内容だけでなく、相手にどのように伝わるかを考える視点を持つことが重要であることを学びます。



スライド 61　メールやチャットの利用

②指導を行う際の留意点
導入では、生徒がどのような場面でメールやチャットを利用しているかを振り返らせ、学習内容を身近なものとして捉えられるようにします。そのうえで、同じ内容でも表現の違いによって受ける印象が変わる例を示し、どのような伝え方が望ましいかを考えさせます。
指導では、短い言葉だけの返信が相手に不安や冷たい印象を与えることがある点や、冗談のつもりでも意図どおりに伝わらない場合がある点に触れ、伝え方を調整する必要性を理解させます。また、送信前に文章を読み返すことや、相手の立場に立って考えることが誤解の防止につながることを押さえます。
誤解が生じた場面を扱う際には、特定の人物を責める形にならないよう配慮し、「なぜそのように受け取られたのか」を考えることに焦点を当てます。こうした振り返りを通して、状況に応じて伝え方を工夫しようとする姿勢を育てます。

知られたくないことが知られてしまう危険(4.1.2)62～63
①概要
オンラインでのやり取りでは、送信した情報が意図しない形で他者に伝わる可能性があることを理解します。メッセージの転送や画面の共有、記録の保存などにより、「知られたくないこと」が広がってしまう場合があることに気づかせ、情報の扱い方について考える視点を育てます。



スライド 63　困ったときの対応

②指導を行う際の留意点
指導では、危険性を強調し過ぎるのではなく、「どのようにすれば安心して使えるか」という観点から考えさせることが重要です。例えば、送信先を確認することや、個人に関わる情報を安易に書き込まないことなど、具体的な行動と結び付けて理解させます。
また、一度送った情報は完全に消去できない場合があることにも触れ、軽い気持ちで発信した内容が後から影響を及ぼす可能性について考えさせます。ただし、不安を与える指導にならないよう留意し、落ち着いて確認する習慣を持つことで安全に活用できることを伝えます。
さらに、判断に迷ったときには一人で抱え込まず、家族や教員など周囲に相談することが大切である点を押さえます。情報を慎重に扱おうとする意識を育てることで、安心してオンラインコミュニケーションを行う態度につなげます。

(4)学習の成果と評価
本節の学習を通して、生徒がオンラインでのコミュニケーションの特徴を理解し、対面との違いを踏まえて伝え方を考えようとする姿勢を持つことを目指します。
また、自分の発信が相手に与える影響を想像しながら行動しようとする思考・判断・表現力の育成を重視します。単に知識として理解するだけでなく、実際のやり取りの場面において相手を意識した行動が取れるかを評価の観点とします。
最終的には、情報を適切に扱いながら他者とよりよい関係を築こうとする主体的な態度が見られることを目標とします。

(5)参考 URL
① デジタル・メディア・リテラシー育成の手引き
出典元：文部科学省
https://www.mext.go.jp/content/20260109-mxt_kyoiku01-000046695_06.pdf
文部科学省が示すデジタル・メディア・リテラシーの育成に関する指導の視点や考え方を整理した資料です。情報の信頼性や根拠に基づく判断のあり方、教育現場での具体的な支援方法などが示されており、情報を見極める力や批判的に考える姿勢を育てる際の参考資料となります。

② ネット誹謗中傷・名誉毀損対策について
出典元：警察庁 サイバー犯罪対策課
https://www.npa.go.jp/bureau/cyber/countermeasures/defamation.html
警察庁による、インターネット上の誹謗中傷や名誉毀損に関する対策・注意喚起のページです。書き込みによって誰かが傷つく可能性や、法的な立場から見たリスク、相談窓口の情報などが整理されており、ネット上のコミュニケーションにおける責任やリスクを理解する際の参考になります。

③ インターネットの書き込みと消えない情報
出典元：戸田市立教育センター 道徳教育サイト
https://www.toda-c.ed.jp/moraleducation/moral_g2_04.html
インターネット上に一度公開された情報は簡単には消えないことを説明している教材ページです。書き込みが残る仕組みや、情報が拡散する可能性について子どもにわかりやすく伝えています。第 4 章第 1 節「オンラインでのコミュニケーション」の、送信した情報の影響や責任について考える際の参考資料として使えます。

④ 個人情報保護法に関するよくある質問(FAQ)
出典元：個人情報保護委員会
https://www.ppc.go.jp/personalinfo/faq/APPI_QA/
個人情報保護法に関する基礎的なよくある質問と回答がまとめられている公式 FAQ ページです。個人情報の扱い方、収集・利用のルール、子どもや家庭の視点でも押さえておきたい基本を確認できます。インターネットでやり取りする際に、情報をどのように守るべきか考える際の補助資料として活用できます。

⑤ ネットトラブル事例(ケース 15)
出典元：総務省「インターネットを正しく使うために」
https://www.soumu.go.jp/use_the_internet_wisely/trouble/case/case15.html
総務省が公開するネットトラブル事例のページで、SNS やチャットでの誤送信・拡散などの具体例が示されています。何気ない書き込みが思わぬトラブルにつながる仕組みや、実際に起きた事例を通じて安全な使い方を学ぶ際の参考になります。

指導用ガイド：デジタル社会を知る
第 4 章 第 2 節 ネットでのいやがらせ

(1)学習目標と単元の概要
本節では、インターネット上で起こり得るいやがらせの存在に気づき、その影響について理解するとともに、適切に対処するための基本的な視点を身に付けることをねらいとしています。オンラインでのやり取りは便利である一方、相手の表情が見えないことから、言葉の重みが伝わりにくく、意図しない形で相手を傷つけてしまう場合があります。こうした特徴を踏まえ、他者への配慮を持って行動することの重要性を理解させます。
また、いやがらせは特別な場面だけで起こるものではなく、誰にとっても身近な問題となり得ることに目を向けさせます。本節では、被害を受けた場合だけでなく、周囲で起きている場面に気づいたときにどのように行動すればよいかについても考えさせます。
授業では具体的な場面を想定しながら、「どのような行動が望ましいか」「一人で抱え込まないためにはどうすればよいか」といった観点で学習を進めます。最終的には、自他を大切にしながら安全にインターネットを利用しようとする態度の形成を目指します。

(2)指導の要点と基本方針
指導にあたっては、いやがらせの深刻さを必要以上に強調するのではなく、生徒が現実的に起こり得る問題として理解できるよう配慮することが重要です。不安を与えることを目的とするのではなく、「困ったときには対処できる」という安心感を持たせる指導を心掛けます。
まず、オンラインでは相手の反応が見えにくいため、軽い気持ちで書いた言葉が相手を傷つけてしまうことがある点に気づかせます。対面であればすぐに誤解を解ける場面でも、文字だけのやり取りでは意図が伝わらず、関係の悪化につながる場合があることを理解させます。
また、いやがらせを受けた際に「自分が悪いのではないか」と感じてしまうことがある点にも触れ、一人で抱え込まないことの重要性を丁寧に伝えます。家族や教員など、信頼できる大人に相談することで状況が改善する可能性があることを示し、助けを求める行動を肯定的に捉えられるよう支援します。
さらに、傍観者にならない視点も育てます。周囲で起きている問題に気づいたときにどのような行動ができるかを考えさせることで、安全なコミュニケーション環境を支える意識につなげます。

(3)具体的な指導の展開
ネットでのいやがらせ(4.2.1)66～67

①概要
ネットでのいやがらせには、悪口を書き込む、仲間外れにする、何度も不快なメッセージを送るなど、さまざまな形があることを理解します。直接顔を合わせない環境では行動の影響が見えにくいため、相手の受け止め方によっては深く傷つく場合があることに気づかせます。
また、発信した内容が多くの人の目に触れる可能性がある点にも目を向け、オンラインでの言動には責任が伴うことを理解させます。他者を尊重しながら行動することが、安心して利用できる環境につながることを押さえます。



スライド 68　ネットでのいやがらせ

②指導を行う際の留意点
導入では、生徒が想像しやすい場面を取り上げ、「どのように感じるだろうか」と問いかけることで相手の立場を考える機会を設けます。その際、具体的な個人や事例を想起させるのではなく、一般的な状況として扱うことで心理的負担を軽減します。
指導では、「してはいけないこと」を列挙するのではなく、相手を尊重する行動とはどのようなものかを考えさせます。何気ない言葉でも相手にとっては大きな意味を持つことがあるため、送信前に立ち止まって考える姿勢の大切さを伝えます。
また、いやがらせを見かけた場合にどのように振る舞うことが望ましいかについても触れ、無関心でいることが状況を悪化させる可能性があることに気づかせます。ただし、生徒に過度な責任を負わせるのではなく、信頼できる大人に知らせることも大切な行動であると理解させます。

いやがらせを受けたときの対応(4.2.2)68～70
①概要

いやがらせを受けた場合には、一人で抱え込まず、適切に対処することが重要であることを理解します。冷静に状況を捉え、周囲に助けを求めることが問題の解決につながる可能性がある点に気づかせます。
また、感情的に反応すると状況がさらに悪化する場合があるため、落ち着いて行動することの大切さを学びます。自分を守るための行動を知ることで、安心してインターネットを利用する姿勢を育てます。



スライド 70　いやがらせへの対応

②指導を行う際の留意点
指導では、被害を受けたときに「誰にも言えない」と感じてしまう心理に配慮し、相談することは弱さではなく自分を守る行動であると伝えます。相談先として家族や教員など身近な大人の存在を具体的に示すことで、助けを求めやすい環境を意識させます。
また、証拠となる情報を残しておくことが役立つ場合がある点にも触れ、慌てて削除するのではなく、落ち着いて対応する姿勢を促します。ただし、過度に対処方法を強調するのではなく、「一人で解決しようとしない」ことを中心に据えます。
さらに、被害を受けた側だけでなく、周囲の支えが重要であることにも目を向けさせます。安心して相談できる関係を築くことが、安全な学習環境や生活環境につながることを理解させます。

(4)学習の成果と評価
本節の学習を通して、生徒がネットでのいやがらせの影響を理解し、相手を尊重した行動の重要性に気づくことを目指します。
また、困った状況に直面した際に一人で抱え込まず、適切に対処しようとする判断力と態度の育成を重視します。知識の理解にとどまらず、安全なコミュニケーション環境を守ろう

とする意識が見られるかを評価の観点とします。
最終的には、自他の尊厳を大切にしながら責任ある行動を取ろうとする主体的な姿勢を養うことを目標とします。

(5)参考 URL
① ネットでのいやがらせと法的対応
出典元: IT 弁護プロ(弁護プロコラム)
https://itbengo-pro.com/columns/278/
ネット上の書き込みや嫌がらせに対して、どのような法的対応や対処方法があるかを解説している記事です。SNS や掲示板での誹謗中傷・嫌がらせに対する法的ルールや相談の手順、対応策について具体的に説明されています。第 4 章第 2 節「ネットでのいやがらせ／いやがらせにあってしまったら」における被害の理解と対処の実際を学ぶ際に役立つ資料です。

② ネット上の誹謗中傷への対応と注意点
出典元: 政府広報オンライン
https://www.gov-online.go.jp/article/202011/entry-8834.html
インターネット上での誹謗中傷やトラブルについて、具体例を挙げながら注意点や対応方法を解説している記事です。書き込みが拡散・保存される特性や、被害にあった場合の相談先・対処方法などが整理されており、第 4 章第 2 節「ネットでのいやがらせ」を学ぶ際の参考資料として活用できます。

③ ネットいじめとは？なくすためにできること
出典元: 日本ユニセフ協会
https://www.unicef.or.jp/news/2022/0030.html
ネットいじめの現状や具体的な事例、その影響について解説している記事です。SNS やメッセージアプリでの嫌がらせの実態とともに、被害を防ぐためにできることや周囲の支えの大切さについて紹介しており、第 4 章第 2 節「ネットでのいやがらせ」を学ぶ際の参考資料として活用できます。

④ インターネットトラブル事例集
出典元: 総務省「インターネットを正しく使うために」
https://www.soumu.go.jp/use_the_internet_wisely/trouble/
総務省が提供するインターネット上のさまざまなトラブル事例を一覧形式でまとめたページです。迷惑行為、誹謗中傷、詐欺など具体的なケースが紹介されており、ネットでのいや

がらせ・トラブルの種類や対応について理解する際の参考資料として活用できます。

⑤ 情報リテラシー教育の基礎資料
出典元: 国立情報学研究所(NII)
https://www.nits.go.jp/materials/intramural/files/154_001.pdf
国立情報学研究所が提供する情報リテラシーに関する基礎資料で、情報の収集・評価・活用の考え方が整理されています。事実と意見の区別や根拠に基づく判断のあり方についても触れられており、第 3 章第 2 節「正しい情報か知るには」で扱う情報の見極め力を育てる際の参考資料として活用できます。

第 5 章　デジタル社会と未来

― これからの社会の中でどのようにデジタルと関わるかを考えることを目指します ―

本章では、これまでの学習を踏まえ、デジタルを活用できることの意義と、社会の中で向き合うべき課題の双方に目を向けながら、これからの時代をどのように生きていくかを考えることを目的とします。デジタル社会を受け身で捉えるのではなく、自らの生活と結び付けて理解し、主体的に関わろうとする姿勢を育てます。

指導にあたっては、利便性だけに注目するのではなく、デジタル社会がもたらす変化や課題にも視野を広げることを重視します。生活をより豊かにする可能性と同時に、使い方によっては問題が生じることにも気づかせ、多面的に考える視点を養います。

また、「自分にできることは何か」という問いを通して、行動につながる理解を促します。これまでに学んだ判断や配慮の視点を振り返りながら、自分なりの関わり方を考える経験を重ねることで、これからの社会をよりよく生きようとする態度の形成を目指します。

本章は、本教材全体のまとめとして位置付け、デジタル社会の担い手として主体的に行動しようとする意識へとつなげる章とします。

本章の構成

本章は次の 2 節で構成しています。

第 1 節　デジタルを使えることの大切さ
第 2 節　デジタル社会の問題

指導用ガイド：デジタル社会を知る
第 5 章 第 1 節　デジタルを使えることの大切さ

(1)学習目標と単元の概要
本節では、デジタルを使えることがこれからの社会を生きるうえで重要な力となることに気づき、その意義について考えることをねらいとしています。デジタル技術は特別な人だけのものではなく、学習や生活、将来の仕事など幅広い場面で活用されており、社会を支える基盤の一つとなっていることを理解させます。
これまでの学習で、生徒はデジタルの仕組みやインターネットの役割、情報の見方、他者との関わり方について段階的に学んできました。本節ではそれらを振り返りながら、「使えるようになることで何が広がるのか」という視点から理解を深めます。単に操作できることにとどまらず、目的に応じて活用しようとする姿勢が大切であることを押さえます。
授業では、身近な生活の中でデジタルがどのように役立っているかを整理し、自分の可能性とのつながりを考える活動を通して学習を進めます。最終的には、変化し続ける社会の中で学び続けながらデジタルと関わろうとする態度の形成を目指します。

(2)指導の要点と基本方針
指導にあたっては、まず生徒がすでに多くの場面でデジタルを活用していることに気づかせることが重要です。調べ学習や連絡、情報収集などの経験を振り返らせることで、デジタルが生活を支える身近な存在であると実感できるようにします。
そのうえで、「できることが増えると選択肢が広がる」という視点を示します。例えば、知りたいことを自分で調べられることや、多様な人とつながる機会が生まれることなどに触れ、デジタルを活用する力が可能性を広げることを理解させます。ただし、技能の習得だけを目的とするのではなく、「何のために使うのか」を考える姿勢を育てることが求められます。
また、社会が変化し続ける中では、新しい技術に触れながら学び続けることが重要である点にも目を向けさせます。すべてを知っている必要はないが、必要に応じて学ぼうとする姿勢が将来につながることを伝えます。デジタルを難しいものとして捉えるのではなく、生活をより豊かにするための道具として前向きに理解させることが大切です。
さらに、これまでに学んできた「見極める」「配慮する」「適切に関わる」といった視点を振り返らせ、デジタルを使いこなすとは判断しながら活用することであると整理します。理解を断片的な知識で終わらせず、行動へと結び付ける指導を意識します。

(3)具体的な指導の展開
未来のデジタルを使った仕事(5.1.1)75～76

①概要
社会の中でデジタル技術の活用が進むことにより、働き方や仕事の内容が変化していることを理解します。多くの職業においてデジタルが活用されており、特定の分野だけでなく幅広い仕事を支える基盤となっていることに気づかせます。
また、将来の仕事の中には現在は存在していないものが生まれる可能性もあることに触れ、変化する社会に対応しながら学び続ける姿勢の重要性を理解させます。デジタルを使えることは職業の選択肢を広げることにつながるという視点を持たせることがねらいです。



スライド　75　　デジタルを活用する仕事

②指導を行う際の留意点
導入では、生徒が知っている仕事の中でデジタルが使われている例を挙げさせ、技術が社会を支えていることを実感できるようにします。その際、専門的な職業だけでなく、身近な仕事にも目を向けさせることで理解を深めます。
指導では、「将来のために特別な技能を今すぐ身に付けなければならない」といった不安を与えないよう配慮し、変化に応じて学び続ける姿勢が大切であることを伝えます。すべてを知る必要はなく、必要なときに学ぼうとする態度が将来につながることを押さえます。
また、技術だけでなく、人と協働する力や判断する力も重要である点に触れ、これまでに学習してきた内容との関連を意識させます。デジタルは仕事を支える道具であり、それをどのように活用するかを考えることが重要であると理解させます。

デジタルを使いこなすには(5.1.2)79～81
①概要

デジタルを使いこなすとは、単に操作ができることではなく、目的に応じて適切に活用することであると理解します。必要な情報を見極めることや、相手を意識して発信することなど、これまでに学んできた視点を統合しながら活用する姿勢を育てます。
また、技術は今後も変化し続けるため、一度学べば終わりではなく、状況に応じて新しい知識を取り入れていくことが重要である点にも目を向けさせます。自分に合った方法で学び続けることが、デジタル社会の中で主体的に行動する力につながることを理解させます。

②指導を行う際の留意点
指導では、得意・不得意にかかわらず、誰もが少しずつ使い方を身に付けていくことが大切であると伝えます。苦手意識を持つ生徒に対しては、分からないことを調べたり周囲に相談したりすることも「使いこなす力」の一部であると示し、前向きに取り組めるよう支援します。
また、デジタルを活用する際には目的を意識することが重要である点を押さえます。何のために使うのかを考えることで、必要な機能や情報を選択できるようになることを理解させます。
さらに、安全に活用するためには、情報を見極める力や他者への配慮も欠かせないことに触れ、第 1 章から第 4 章までの学習が「使いこなす力」につながっていることを振り返らせます。理解を学習のまとめにとどめず、今後の行動へ結び付けることが重要です。



スライド　80　　デジタルを使いこなす力

(4)学習の成果と評価
本節の学習を通して、生徒がデジタルを使えることの意義を理解し、それが生活や将来の可能性と結び付いていることに気づくことを目指します。
また、目的に応じてデジタルを活用しようとする思考・判断・表現力の育成を重視します。

単なる技能の習得としてではなく、自らの生活をよりよくするために活用しようとする意識が見られるかを評価の観点とします。
最終的には、変化する社会の中で学び続けながら主体的に行動しようとする態度を養うことを目
標とします。

(5)参考 URL
① Society 5.0 の実現に向けた取組
出典元：国土交通省「国土交通白書」
https://www.mlit.go.jp/hakusyo/mlit/r04/hakusho/r05/html/n1221000.html
国土交通分野におけるデジタル技術の活用や、Society 5.0 の実現に向けた取組について
解説している白書ページです。インフラ整備や防災、交通分野などでのデジタル活用の具体例が示されており、デジタルを使いこなす力が社会の発展にどのようにつながるかを理解する際の参考資料となります。

② 学習者用デジタル活用ガイドライン(PDF)
出典元：文部科学省
https://www.mext.go.jp/content/20201002-mxt_jogai01-100003163_1.pdf
学校教育におけるデジタル機器やオンライン教材の活用について示された文部科学省のガイドライン資料です。学習活動で ICT を効果的に利用するための基本的な考え方や、生活とのバランスを保ちながらデジタルを活用する際のポイントが整理されています。第 5 章第 1 節「デジタルを使えることの大切さ」を学ぶうえで、教育現場での活用例や方針を理解する参考資料として役立ちます。

③ 子どものデジタル社会参画と政策資料(DX 関連)
出典元：内閣府青少年育成施策本部
https://www.cfa.go.jp/assets/contents/node/basic_page/field_ref_resources/c1890510-04d4-497b-9e23-a7f514016c7d/04f2c133/20250709_councils_kodomo_seisaku_DX_40.pdf
子どもとデジタル社会の関わりに関する政策資料で、デジタル技術を安全・主体的に使いこなすための環境整備や支援方針をまとめています。子どもが将来デジタル社会に参加し

ていく際に必要な力や、教育・家庭・社会の役割について整理されており、第 5 章第 1 節「デジタルを使えることの大切さ」を学ぶ際の資料として活用できます。

④ 初等中等教育における情報活用能力の育成(PDF)
出典元：文部科学省
https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/zyouhou/detail/__icsFiles/afieldfile/2016/07/26/1374711_01.pdf
文部科学省が示す、初等中等教育段階での情報活用能力育成の考え方や指導例をまとめた資料です。ICT 機器を学習に取り入れる際の留意点や段階的な活用イメージが記載されており、デジタル社会で活躍するために必要な基礎スキルを理解する際の参考として役立ちます。第 5 章第 1 節「デジタルを使えることの大切さ」で扱う学習活動と ICT の関係 を考える際の一助になります。

⑤ 情報通信白書 令和 7 年版(データ集)
出典元：総務省
https://www.soumu.go.jp/johotsusintokei/whitepaper/ja/r07/html/datashu.html
総務省が公表する「情報通信白書 令和 7 年版」のデータ集ページです。最新の統計データとして、デジタル社会の状況や利用動向を確認する際の参考資料となります。

指導用ガイド：デジタル社会を知る
第 5 章 第 2 節 デジタル社会の問題

(1)学習目標と単元の概要
本節では、デジタル社会の利便性を理解するだけでなく、その一方で生じ得る課題にも目を向け、どのように向き合えばよいかを考えることをねらいとしています。生活の中でデジタル機器を利用する時間が増える現代において、使い方によっては健康や生活習慣、人との関係に影響が及ぶ可能性があることに気づかせます。
これまでの学習では、デジタルの仕組みや活用方法、安全な関わり方について理解を深めてきました。本節ではそれらを踏まえ、利便性と課題の両面からデジタル社会を捉える視点を育てます。問題を否定的に捉えるのではなく、適切に理解し行動することでよりよく活用できることを押さえます。
授業では、身近な生活を振り返りながら、「どのような点に気を付けるとよいか」「自分にできることは何か」といった問いを通して学習を進めます。最終的には、自分の生活とのバランスを考えながら主体的にデジタルと関わろうとする態度の形成を目指します。

(2)指導の要点と基本方針
指導にあたっては、問題点を過度に強調して不安を与えないよう配慮することが重要です。デジタルを否定するのではなく、「どのように使えばよりよいか」という前向きな視点で扱います。まず、生徒が日常生活の中でどの程度デジタルに触れているかを振り返らせ、使用時間や利用場面から生活との関係を具体的に捉えさせます。そのうえで、長時間利用による疲労や生活リズムの乱れなど、身近な影響について考えさせます。また、便利さに頼りすぎることで対面交流や身体活動の機会が減る可能性にも触れ、生活全体のバランスを意識する大切さを理解させます。ただし、「使いすぎはよくない」と一方的に示すのではなく、自分に合った関わり方を考える過程を重視します。さらに、本節が教材全体のまとめに位置付くことを踏まえ、これまでに学んできた判断や配慮の視点と結び付けて理解を整理します。問題に気づくだけで終わらせず、行動へとつなげる指導を意識します。

(3)具体的な指導の展開
デジタル社会の問題は何か(5.2.1)82～84
①概要
指導にあたっては、問題点を過度に強調し、不安を与える内容にならないよう配慮することが重要です。デジタルを否定するのではなく、「どのように使えばよりよいか」という前向きな視点で扱います。

まず、生徒が日常生活の中でどの程度デジタルに触れているかを振り返らせます。使用時間や利用場面に目を向けることで、生活との関係を具体的に捉えられるようにします。そのうえで、長時間の利用による疲労や生活リズムの乱れなど、身近に起こり得る影響について考えさせます。
また、便利さに頼りすぎることで、対面での交流や身体を動かす機会が減る可能性にも触れ、生活全体のバランスを意識することの大切さを理解させます。ただし、「使いすぎはよくない」と一方的に示すのではなく、自分に合った関わり方を考える過程を重視します。さらに、本節が教材全体のまとめに位置付くことを踏まえ、これまでに学んできた判断や配慮の視点と結び付けながら理解を整理します。問題に気づくだけで終わらせず、行動へとつなげる指導を意識することが求められます。



スライド 83　デジタル社会の課題

②指導を行う際の留意点
導入では、「長く使い続けたあとにどのような感覚になるか」と問いかけ、身体的な実感から考えを引き出します。自分の経験と結び付けることで、問題を現実のものとして捉えやすくなります。指導では、利便性と課題を対比しながら示すことが効果的です。便利だからこそ使う時間が増える可能性があることを理解させ、どのようにバランスを取ればよいかを考えさせます。
また、問題点を列挙するだけで終わらせず、「どうすればよいだろうか」と次の行動を考える問いへつなげます。自分の生活を振り返る機会を設けることで、主体的に判断しようとする姿勢を育てます。

自分でできること(5.2.2)85～88

①概要
デジタル社会の中で生活するうえでは、問題を理解するだけでなく、自分なりに工夫しながら関わることが大切であると理解します。利用時間を意識することや、休憩を取り入れること、身体を動かす時間を確保することなど、生活との調和を図る行動が重要である点に気づかせます。
また、自分に合った使い方を見つけることが、健康で充実した生活につながることを押さえます。デジタルを遠ざけるのではなく、適切な距離感を持って活用する視点を育てることがねらいです。



スライド 86　自分でできる工夫

②指導を行う際の留意点
指導では、「何が正解か」を一方的に示すのではなく、自分の生活に照らして無理のない行動を考えさせることが重要です。例えば、使う時間を決めることや就寝前の利用を控えることなど、実行可能な工夫に目を向けさせます。
また、デジタルを使う時間だけでなく、使わない時間の過ごし方にも意識を向けさせます。友人との交流や身体活動など多様な過ごし方に触れることで、生活全体のバランスを考える視点を育てます。
まとめでは、「これからどのようにデジタルと関わっていきたいか」を言葉にする機会を設けます。自分で選び取った行動目標を持たせることで、学習を日常生活へと結び付けます。

(4)学習の成果と評価
本節の学習を通して、生徒がデジタル社会の課題に気づき、自分の生活との関係を具体的に説明できることを目指します。

また、生活とのバランスを考えながらデジタルを活用しようとする思考・判断・表現力の育成を重視します。知識として理解するだけでなく、自分にできる行動を考えようとする姿勢が見られるかを評価の観点とします。
最終的には、利便性と課題の両面を踏まえながら主体的に判断し、よりよい生活を築こうとする態度を養うことを目標とします。

(5)参考 URL
① スマホ・インターネットと心と体の健康
出典元：日本医師会「健康ぷらざ Plus」
https://www.med.or.jp/people/plaza/plus/vol7/
　日本医師会が提供する健康情報ページで、スマートフォンやインターネット使用が心身に与える影響について解説されています。画面時間と生活リズム、睡眠やストレスとの関係など、健康面の視点からデジタル利用と生活のバランスを考える際に役立つ資料です。

② 青少年インターネット利用環境調査・結果一覧
出典元：内閣府青少年育成施策本部
https://www.cfa.go.jp/policies/youth-kankyou/internet_research/results-etc/r05
青少年のインターネット利用に関する最新の調査結果や報告書一覧をまとめたページです。利用時間やトラブル発生状況、家庭でのルール・対処行動などが調査されており、デジタル利用の課題と対策を具体的数値・実態から理解する際の基礎資料として活用できます。

③ 青少年インターネット利用環境整備 リーフレット一覧
出典元：内閣府青少年育成施策本部
https://www.cfa.go.jp/policies/youth-kankyou/leaflet
青少年のインターネット利用やデジタル生活を考える際に役立つ啓発リーフレットをまとめた一覧ページです。利用時間・ルールづくり・安全な使い方・相談先など、子どもと保護者がともに考えるべきポイントが視覚的に整理された資料としてダウンロードできます。

④ 就寝前のスマホ利用と睡眠への影響
出典元：総務省「インターネットを正しく使うために」
https://www.soumu.go.jp/use_the_internet_wisely/preschool/nayami/12/

就寝前のスマートフォン利用や長時間の画面視聴が、睡眠や生活リズムに与える影響について解説しているページです。ブルーライトや夜間利用の問題、家庭でできる工夫などが分かりやすくまとめられています。

⑤ スマホ・デジタル機器と睡眠・生活リズム（教育資料）
出典元：横浜市立学校（教育資料 PDF）
https://www.edu.city.yokohama.lg.jp/school/es/mutsuuraminami/index.cfm/1,2226,c,html/2226/20210705-170233.pdf
小学生向けに、デジタル機器（スマホ・ゲーム等）の使い過ぎが睡眠や生活リズムに与える影響について整理された教育資料です。画面時間の調整・休憩の取り方・夜間利用の注意点など、子どもが自分で気をつけるべき具体的な行動例がまとめられています。第 5 章 第 2 節「デジタルの利便性と課題／生活とのバランス」を考える際の補助資料として使えます。